主婦会作りの意義を確認し
組織強化をはかろう
交流座談会をはじめるに当って

主婦会では、さきに組織強化のために、主婦会員が自覚をたかめていくためには、どういう準備が必要であるか、ということを具体的に明らかにするため、本年度五つの主要な問題について話し合いを深め、意志の統一を行ないました。各支部毎に分会長会議を開催し、みんなの意見を出し合いながら、具体的な活動自体に対する欠陥を反省し、今後、さらに立派な活動ができるための方針を出し、発展させることを決意しました。

実態を知ろう

私たちの生活は、なぜ貧乏がつづくのか。職場での合理化のみでなく、いまや体制的合理化といわれる攻撃の強化と私たちの生活とどういう関係にあるのだろう。ベトナム戦争からくる不安。現在の教育のあり方と子どもの将来。地方住民としての権利が憲法で保障されているといわれていながら、なぜ現実は違うのだろうか。内職に行かなくては生活ができないほど、なぜ夫の賃金は低いのだろうか。といったように、余りにも多い「なぜか」という問題と、主婦会活動の意識の問題などを話し合いました。

その結果、私たちの生活にメスを入れ、この「なぜか」のカベをどうしたら打ち破れるだろうかということについて、具体的に問題を出し合いました。そして、一人一人の主婦会員の悩みや、希望を率直に聞く交流座談会を開き、主婦会員のありのままの実態を本当に知ることから始めようということが決められました。

悩みを率直に出し合おう

九月三日から一三日まで、いっせいに各地域分会毎に開かれる主婦会交流座談会は、具体的には次のような内容で話し合われます。現在まで、家族会議を開こうということが決められていましたが、各家庭で実際に行なわれているかどうか。また、その中でどういうことが話し合われているか出し合う中で、夫の職場の生活や、子どものことなど問題点を出し合い、みんなで話し合いを深めます。またほとんどの主婦が内職に行っているが、内職によって起る家庭内の問題と、子どものしつけ、または内職先の悩みや、よろこび。それを、どう解決していっているか。

地域住民としては現在、対地方自治体や、学校の問題など、さまざまな市民としての要求を、第二組合員も含めた斗いとして、拡げることができるかどうか。など、みんなで率直に出し合い、話し合うのが座談会の目的であります。

相互理解を斗いの基盤に

話の内容は、職場の話から、子どものこと、主婦会活動の話、内職の話、教育、就職、健康等々と多種多様にわたると思います。しかしこの悩みや希望が、一つ一つバラバラであってはなりません。これらの問題を、どうしたならば一本に結びつけて運動として発展させるかを、ざっくばらんに話し合うことが、座談会の真の目的であります。ただたんにグチのいい放し、聞きっ放しで終らぬようにまた自分の話したことを、みんなで討論してくれるなど、話し合うことの楽しみに結びつき、会員の中から、ぜひこのような座談会を今後もくり返して開いてほしいという会員の気持が、率直に出されるようにすることも大切だと思います。

もちろん座談会の形式が、役員が話をおしつけるということを極力さけ、生活の苦しみ、悩みや、体験を引き出して、これをどうしたらよいか、みんなで話し合うようにします。

また、この座談会で、全地区から出された意見は、集約を行い、今後の前進のための深い検討が加えられることは当然であります。この交流座談会を通して、組合についての理解を深め、主婦会の組織づくりを強化する意義を、さらに確認するなかで、主婦会の結束を強めていきたいと思います。

そのことが次の斗いに、会員の気持を結集する基盤になることも大きな意義の一つであります。

政府は「四十年度の財源不足分を埋めるため日銀からの借入金か、公債発行のどちらかによるほかない」と、今年度から赤字公債を発行する意向である。公債（国債）は政府の借金証文（債券）で赤字公債は財政の赤字を穴うめするための公債「わが国の公債の歴史はそのまま戦争の歴史である」（「日本の財政」昭和三六年版。そのため財政法第四条では、憲法九条（戦争放棄）の裏付けとして赤字公債の発行を禁止しているほど。それを破ってまで発行を決めた裏には財界の強い圧力が働いた。

〈時のことば〉
インフレを招く
赤字公債

約四千億円と見込まれる公債発行は結局、日銀券の増発を招き、独占資本の資金源となるいっぽう、勤労者は激しいインフレに苦しむことになる。

〝お父さんがよく協力してくれるようになつた〟と話し合う長溝分会主婦会員

話し合いを深めよう
長溝分会交流座談会

主婦会員の悩みや意見を聞き、その実態を知ろう、ということで開かれた主婦会交流座談会は三日から一三日まで、各地域分会毎に開かれます。

三日、長溝分会では、内職の話夫や子供の話しなどが出され、これからも、もっと話し合いを深め学習をしようということになりました。

長溝分会でも、七〇％の人が内職しており、夕方帰えるときはクタクタにつかれ、何をやる気も起きないほどです。しかし家族で話し合うようになってから、みんなよく協力してくれるようになったまた子供が大きくなると、話題も社会的なものになり、お母さんでは相談相手にならない、と子供にいわれないように、もっと勉強しなければならない。またお父さんがどんなところで仕事をやっているかも知らないようでは困るからそんなことも、家族みんなでなんでも話し合える家族会議にしようとなごやかな雰囲気のうちに、悩みや苦しみを出し合って話し合われました。

詩

五人組のうた

宮浦　高椋竜生

合理化と対決だ　おいやるぞ
三本線だ　根性だ
ひとりひとりが胸張って
抵抗ガッチリ
見せるみいけの底ぢから
五人組　五人組
炭労みいけの五人組

この搾取ゆるさぬぞ
おいやるぞ
三本線だ　根性だ
ひとりひとり肩組んで
差別はねのけ
みいけの歴史をいまつくる
五人組　五人組
炭労みいけの五人組

切羽でも職場でも　おいやるぞ
三本線だ　根性だ
ひとりひとりが腕組んで
姿勢を正し
斗かうみいけの活動家
五人組　五人組
炭労みいけの五人組

炭労のきょうだい
立ち上がろう
炭掘る仲間だ　根性だ
ひとりひとりが　輪になって
敵くだくまで
ちからゆるめず斗かおう
五人組　五人組
炭労みいけの五人組

連載小説

音
―みいけ大変災のなかから―

加藤説夫

（24）

「ほんに、そぎゃんとた、子供が考えるように簡単じゃあなかけんなあ。あんまり、おばちゃんば困らせると帰るちいいださすばい」と、子供をたしなめる口ぶりで、自分をたしなめた。

変災犠牲者の四十九日もすぎ、誰もがまだ心のたちなおりをみせぬまに、歳がかわった。いつもあかるく、のどかな社宅の新年も、この年は鳴りをひそめた気配であった。犠牲者をださなかった家庭でも、遺家族のことを思って、春の装いにも、話題にも心をつかった。

四十九日がすぎたら生産を再開したいという会社の思惑は大きく狂い、焦りが目についてきた。荒れた坑内の復旧には資金を惜まず請負業者を入れ、炭塵抑えのために撒いた石灰粉で、坑内は白堊の宮殿みたいになった。それでも第一回の福岡保安監督署の保安監察は、三川鉱の生産再開を許さなかった。

生産再開にたいする会社の焦りは、再開のための諸協定に微妙に影響し、その後の坑内保安の問題について、三池労組は久しぶりに発言権を復活した。そして変災から七十三日目、一月二十一日にやっと三池鉱の全面生産再開にこぎつけたのである。

再開第一日は、向井たちも試運転みたいな程度で早くきりあげ、祝いの折り詰と祝酒をのんで早目に三川坑をでたが、途中で思いついて、天領病院に回った。

一緒に被災した中原は、妻帯したばかりの若者で、立ち直りも早いと思っていたが、意外に症状が思わしくなかった。強度の記憶喪失症で、新妻の顔さえ記憶になかった。先週見舞に寄ったときも、向井にむかって、

「ねえ、あの女を、誰か知っとっとですか。この間から、俺によう世話してくれよるが、どうも俺に気があるのじゃなかかて思うとるばってん―」

と、巡回の看護婦と、何かしきりにうなづきながら話している妻君の横顔を、首をかたむけてまじまじと眺めていたのである。

その日も向井が入っていくと、ベッドの上にあぐらをかいていた中原は、向井を見てニコニコ笑い

「いやどうも、毎日お見舞にきていただいて、すみません。どうですか、ああたの方は、奥さんは少しは好かとですか」

何もしらない人がきいたら、少しも変ではないが、中原は自分の記憶喪失を恥じ、当面を糊塗するために、思いついたままの言葉を口にしているだけであった。

「あんなことをいっては―」

向井が〝やもめ〟暮しであることをしっている中原の妻君は、頬を染めながら茶をだした。

「奥さんのことも判らないのですか」

「ハイ、ときどき顔をじっと見て考えこむことがあるが、思いだせないらしいんですの。私を付添婦とでも思っとるとでしょう。着物なんか洗濯したのと着替えさせてやるときなんか、どうもどうもーって恐縮しちゃって笑っていいか、悲しんでいいか判らない気持になるんですよ」

その帰り道、向井は一緒に帰った医局員から「一酸化炭素中毒患者は、SEXの障害をきたしているらしい」という新事実を聞いてがく然とした。それが事実なら人道問題である。向井は家へ帰るまえに荻村のところに寄ってみる気になった。

（さしえ・村山敏美）